

近代日本語の間接疑問構文とその周辺：従属力節を持つ構文のネットワーク

著者	志波 彩子
雑誌名	国立国語研究所論集
号	10
ページ	193-220
発行年	2016-01
URL	http://doi.org/10.15084/00000815

近代日本語の間接疑問構文とその周辺

——従属カ節を持つ構文のネットワーク——

志波彩子

名古屋大学大学院／国立国語研究所 共同研究員

要旨

本研究は、主に高宮（2003, 2004, 2005）の一連の研究によって明らかにされた間接疑問構文の歴史的な発達について、その痕跡が明治期の日本語にどの程度見られるかを、小説（文学）テキストのコーパスから抽出された用例をもとに、現代語とも対照しながら記述した。間接疑問構文の主節述語は、近代に入っても未決未決タイプ（「知らない」「分らない」等）が多いが、江戸後期には未発達であった既決タイプ（「分かる」「知っている」等）も1割を超える割合で現れ、対処タイプ（「考える」「確かめる」等）においても形態的な制約がなくなり、主節述語のヴァリエーションが増えていることが確認された。また、間接疑問節のタイプでは、疑問詞疑問のタイプが非常に優勢であることも明らかになった。

本研究ではさらに、主節述語が心理動詞である間接疑問構文を典型的な間接疑問構文とし、これと同じ従属カ節を持つ構文として、依存構文、間接感嘆構文、照応構文、潜伏疑問構文、内容構文、二文連置構文（背景注釈、課題提示、言い換え）を主に取り上げ、それぞれの構文の意味・構造的な特徴と、間接疑問構文との関係（ネットワーク）を考察した。この中で、未決タイプの「知れない」や既決タイプの間接疑問構文は、間接感嘆構文に意味的に非常に近いことを明らかにした。また、明治期に入って一般的に見られるようになった間接疑問構文の既決タイプは、原因・理由・条件を伴う構造で述べられることが多く、さらにこの構造の影響を受けながら依存構文が近代に入って徐々に使われ始めたのではないかという考察を示した。最後に、二文連置構文における背景注釈型、課題提示型、言い換え型についても、これらと間接疑問構文や潜伏疑問構文との違いや連続性を、用例を示しながら考察した*。

キーワード：間接疑問構文、間接感嘆構文、二文連置、潜伏疑問、未決・既決・対処

1. はじめに

近年、高宮（2003, 2004, 2005）や高山（2015）、衣畑・岩田（2010）等の研究により、日本語の間接疑問構文¹の歴史的な発達の過程が徐々に明らかにされつつある。日本語の間接疑問構文については、現代語においても、江口（1990, 1994, 1996, 1998ab, 2002, 2013 等）の一連の研究を除いてはほとんど研究の蓄積がない。特に、間接疑問構文にどのようなタイプがあるか、また間接疑問構文に関連した構造を持つ構文とこれとの関連についての詳細な記述はまだない。

* 本研究は、国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」（プロジェクトリーダー：金水 敏）の研究成果である。本稿は、本プロジェクトの第6回研究発表会において発表した「日本語の間接疑問構文の発達をめぐる一近代から現代へ」（2015年3月）の発表原稿を大幅に改訂したものである。

本稿の執筆にあたり、プロジェクトリーダーの金水敏先生と本プロジェクト共同研究員の江口正先生に大変多くのご教示を賜りましたこと、ここに、深く感謝申し上げます。

¹ 本研究では、「疑問節 - カ 主節述語」という文全体を「間接疑問構文」と呼び、「疑問節 - カ」を「間接疑問節」と呼ぶ。

こうした中で、高宮（2003, 2004, 2005）の一連の研究は、間接疑問構文の歴史的な発達を扱った画期的な議論であり、現代語の間接疑問構文を分析する上でも参考になる分類の枠組みを提示している。

本研究は、主に高宮の一連の研究を参照しながら、その歴史的な発達の痕跡が明治期の日本語にどの程度見られるかを明らかにすることを1つの目的とする。具体的な方法としては、近代語のコーパスから抽出された間接疑問構文とその周辺の構文タイプの分布を示す。そして、ときに現代語とも対照しながら、近代日本語における間接疑問構文の特徴を記述し、その周辺の構文との関係（ネットワーク）を考察することを第2の目的とする。なお、本研究では、次のような、主・述で構成される従属節に助詞カが後接し、このカ節を直接に受ける主節述語が心理動詞である構文を典型的な間接疑問構文と見なす。

- (1) 和夫がいつ戻ってくるか（は）分からない。

2. 高宮（2003, 2004, 2005）

高宮（2003, 2004, 2005）の一連の研究では、間接疑問構文をめぐる様々な問題が整理され、分類・考察されている。まず、高宮（2003）では、間接疑問構文とこれに関係する他の構文との関係について、カ節につく助詞の有無や主語の位置、潜伏疑問名詞句などとの関係をめぐって考察されており、これによって、間接疑問構文に関係のある構文として、本稿で二文連置構文²、潜伏疑問構文、内容構文と呼ぶものが主に取り出されている。

次に、高宮（2004）では、助詞カによる間接疑問構文は室町時代に少数現れ始め、江戸期になって一般的に見られるようになったことが主張されている。間接疑問構文が成立する以前は、和文資料では引用のトを伴う構文（(2)）、注釈句による構文（(3)）、和漢混交文ではこれに加え、トイウ名詞ヲによる構文（(4)）が用いられていたことが指摘されており、興味深い（下線は原文）。

- (2) その故も、いかなりけむ事とも、思ひ分れ侍らず。（源氏物語・宿木、高宮 2004: 112）
 (3) …折／＼につけて、（大君を）思ふ心の違へる嘆かしさを（大君に）かすむるも、（大君は）
いかゞ思しけん、（著者は）知らずかし³。（源氏物語・竹河、高宮 2004: 112）
 (4) 其外庄園田畠いくらという数を知らぬ。（平家物語・上、高宮 2004: 112）

² ただし、高宮（2003）の段階では、この構文を注釈句と呼んでいる。その後の議論で、「注釈的二文連置」という術語を用いている。この用語は、野村（1995）による。

³ 高山（2015）は、このような「節・けむ 知らず」という構文が上代から認められることを指摘し、間接疑問文の萌芽がすでにこのころに見られたことを主張している。この、「節・けむ 知らず」とは、現代語に訳せば「節・ただらう 知らない」という構文形式である。これに関連して、森・平塚・黒木編（2015）では、鹿児島県甑島の方言において、標準語のダロウに相当する推量や不確かを表す形式「=joo（ヨー）」が、間接疑問節のマーカースとして用いられることが述べられており、興味深い（「どけえ行ったよう知らん（どこに行ったか知らない）」（pp. 116-117 6.5.2, pp. 142-144 7.7.1））。ここで挙げられている例文と白岩広行氏の私信によると、この方言においても間接疑問構文の主節述語は未決タイプが多く、対処タイプも使われるものの命令・依頼のように形式が限られているように見える。高宮（2005）が調査した江戸後期の間接疑問構文と同じような特徴を見せている。

さらに、高宮（2005）では、「疑問節 - カ 主節述語」という間接疑問構文の歴史的発達を取り上げられ、この構文は、まずカ節が選択疑問タイプ（「彼が来るか彼女が行くか知らない」）から現れ始め、肯否疑問タイプ（「彼が来るか知らない」）が現れ、これに遅れて疑問詞疑問タイプ（「彼がいつ来るか知らない」）が江戸後期に一般的に見られるようになったことが述べられている。また、主節述語のタイプについては、まず藤田（1983, 1997）の3分類でいう未決タイプ（「知らず」）から発生し、室町から江戸にかけては未決タイプがほとんどで、形式に制約がある形で対処タイプ（「タズネウ、トヒテコヒ」等）も存在したが、既決タイプ（「知っている」）は現れないことが明らかにされた。

なお、(1)を見れば分かるように、間接疑問構文における疑問節（カ節）は助詞を伴ったり伴わなかったりすることがあるが、高宮の一連の研究により、カ節に助詞を伴う間接疑問構文は、近代（明治時代）になって一般的に見られるようになったもので、間接疑問構文が現れ始めた室町時代からこの構文がより広く用いられるようになった江戸時代にかけては、いまだカ節に助詞を伴う例はほとんど見られないことも分かっている。

3. 典型的な間接疑問構文とその周辺の構文

高宮（2003, 2004, 2005）の議論によって、もっとも典型的な狭義の間接疑問構文は次のような特徴を持つことが明らかになった（志波・金水 2015）。

(5) 典型的な間接疑問構文

- a. 主語と述語を持つ節に助詞「か」⁴が後接し、そのカ節を直接に受ける動詞（主節述語）がある。
- b. カ節の直後に格助詞や主題・取り立て助詞（「は」「も」等）が後接することができる。
- c. カ節内には、打消しや時制、ノダ文の「の」は含みうるが、ダロウや丁寧は含み得ない。

上のすべての条件を満たしながら、典型的な間接疑問構文とはやや性質の異なる構文がある。それは、江口（1996）で「依存性」の述語とされるものを主節述語に要素として持つ構文である。本研究ではこれを依存構文と呼ぶ。依存構文は2つの間接疑問節を持ちうる構文である。

(6) 誰と結婚するかで彼女が幸せになれるかが決まる。

(5a) に関して、従属カ節を持ちながら、カ節を直接に受ける主節述語が存在しない構文がある。その代表的な構文が二文連置構文（懸垂疑問文、石居 2008）である（(7)）。高宮（2003）では、この二文連置構文が自問系直接疑問構文に近いことが指摘されている。一方で、同じくカ節を直接に受ける主節述語は存在しないものの、思考・疑惑・問題等を表す名詞がこれを受ける構文がある。本研究ではこれを内容構文と呼び、間接疑問構文に近い構文として位置づけた（(8)）。

⁴ 本研究では節に助詞「か」が後接するもののみを扱うが、「か」のほかに「やら」が後接する間接疑問構文も存在する。ただし、ヤラ節を受ける述語のタイプは限られている（高宮 2004）。

- (7) 宮ははや気死せるか、推伏せられたるままに声も無し。(金色夜叉)
- (8) 「【前略】露骨に云って終えば、時代におくれやしないかなどいう考えは、時代の中心から離れて居る人の考えに過ぎないのだろうよ」(野菊の墓)

(5b) に関して、上の二文連置構文はカ節を受ける主節述語がないため、当然カ節に助詞を後接させることはできないが、間接疑問構文の下位タイプであっても、助詞を後接させることができない構文がある。それは、江口 (2013) で「複雑述語」と呼ばれる述語の一部⁵で、「疑問が残る、不審が残る、見解を明らかにする、議論を進める」などの思考・判断・疑惑・言語活動などを表す名詞と動詞との組み合わせによる述語である。この種の間接疑問構文は、カ節に助詞を後接できないという点では主節述語との結びつきが弱く、相対的に従属度が低い疑問節であると言えるが、「について」等が後接することはでき、また、構文全体を疑問文化することができる点、すなわち主節述語の疑問のスコープにカ節が入ることができる点で二文連置構文とは異なり、やはり間接疑問構文のサブタイプであると見なせる。

- (9) a. 彼が約束を守るのか疑問が残りますか。(複雑述語の間接疑問構文)
 b. *彼が約束を守ったのか、彼女は機嫌がよかったですか。(二文連置構文)

(5c) に関して、ダロウを含むカ節は助詞を後接し得ない上、主語をカ節の前に置くことができないことから、従属度が低く、純粋な間接疑問構文とは異なると考えられる。

- (10) 何人がパーティーに出席したのだろうか、私は知らない。(高宮 2003: 110)
 (11) *私は、何人がパーティーに出席したのだろうか、知らない。(高宮 2003: 110)
 (12) 何人がパーティーに出席したのだろうか、私はそれを知らない。
 (13) 何人がパーティーに参加したのだろうか、私は参加人数を知らない。(高宮 2003: 110)

(10) のような文は、(12) のようなカ節を受ける照応形が省略された文とも考えられる。本研究では、(12) のような主節に照応形を持つ構文を照応構文と呼び、(10) のような文は典型的な間接疑問構文と照応構文との中間に位置するものと見なすことにする。また、この照応構文に近い構文として潜伏疑問構文 ((13)) がある。照応構文も潜伏疑問構文も、主節の心理述語が間接的にカ節を受けるという点で二文連置構文に比べれば間接疑問構文に非常に近い構文であるが、カ節にダロウを含みうる点及び助詞を後接し得ない点で典型的な間接疑問構文と一線を画す。

さらに、間接疑問構文に体系上近いところに位置する構文として間接感嘆構文 (稲田 2007) がある。間接感嘆構文は、カ節にダロウや丁寧を含み得ない点、また主節述語が心理動詞である点で、間接疑問構文に近いところにあると考えられる。

- (14) 彼は自分がいかに幸せかを思った。

⁵ 複雑述語であっても、「節 - カ に懸念を抱く／が心配になる／は判断が難しい」など、カ節に助詞を後接させることができるものも少なくない。なお、この複雑述語に用いられる抽象名詞とカ節の関係は、6.5 で扱う「内容構文」における抽象名詞とカ節の関係と同じである。

一方で、間接感嘆構文では、カ節が疑問ではなく話し手にとって確定した事実であり、他の誰の疑念をも表していない点で、間接疑問構文と異なる。また、間接感嘆構文を構成する心理述語は、間接疑問構文のそれとは典型的には異なる点でも、これを別の構文と見なす必要がある。さらに、間接感嘆構文の場合、カ節に後節する助詞が必須であるという特徴がある。

以上、典型的な間接疑問構文の周辺に位置する構文として、これに近いものから複雑述語の間接疑問構文、依存構文、間接感嘆構文、照応構文、潜伏疑問構文、内容構文、二文連置構文があることを確認した。本研究では、以上の構文以外に、さらに以下の構文を認め、カ節の分類を行った。まず、引用の「と」に続くカ節は、かなり直接疑問構文に近いもの((15))と間接疑問構文と意味・構造的にほとんど変わらないもの((16))があるが、これを引用構文とした。その他の構文として、(17)のような「節-かのごとく／かのように」という形で「あたかも」などの副詞と共に起る構文を比況構文とした⁶。また、(18)のように「動詞の肯定形-カ 否定形」という形で時間や位置がその前後であることを表す構文を前後構文とした。(19)のような「節-のみか／ばかりか」や「するが早いかな」といった構文は慣用的な構文とした。最後に、(20)のような構文はカ節が疑問も感嘆も表していない点で間接疑問構文から体系上かなり離れたところに位置する構文と考えられるが、これを選言構文とした⁷。

- (15) 【前略】恐れ入ます、お召物が濡れますと言ふを、いいさ先させて見てくれろとて氷袋の口を開いて水を搾り出す手振りの無器用さ、雪や少しはお解りか、兄様が頭を冷して下さるのですよとて、母の親心付れども何の事とも聞分ぬと覚しく、【後略】(にぎりえ・たけくらべ)
- (16) 何方かという、昔よりも今の方が却て肥ってはいはしまいかと疑れる位であった。(道草)
- (17) 何時此处へ来て、何処から現われたのか少も気がつかなかったので、あたかも地の底から湧出たかのように思われ、自分は驚いて能く見ると【後略】(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (18) 今の三越の向側に何時でも昼席の看板が掛かっていて、その角を曲ると、寄席はつい小半町行くか行かない右手にあったのである。(硝子戸の中)
- (19) 物音は罷まぬのみか、次第に高まって、近づいて、遂に思い切った潤歩の音になると——少女は起き直った。(浮雲)
- (20) 向うで聞かぬ上は乗り越すか、廻らなければならん。(草枕)

間接疑問構文は、以上挙げたような構文タイプとの相互関係の中で発達してきたと言える。これらの構文タイプを念頭に置きつつ、以下、実際のデータを分析していく。

4. 方法とデータ

扱ったテキストは、『CD-ROM 明治の文豪』(新潮文庫)の中から夏目漱石の数作品と翻訳作品、

⁶ 現代語には、比況構文と連続的である「節-かに見える」(仮想構文)があるが、近代においては未だ発達していなかったようで、用例が見られない。

⁷ ただし、衣畑・岩田(2010)では、選言のカ節と間接疑問のカ節は歴史的には別のものであると述べられている。

石川啄木の作品を除いたテキストである。これらを、『Chaki (ChaKi.NET 2.09β Revision 498)』を用いて形態素解析し、表出形が「か」かつ品詞が「助詞」という条件で検索した。抽出した用例について、「賑やか」「裸か」「かぶり」など、助詞の「か」ではない用例を削除し、慣用表現（そうか、どうか、いいか、～よりか、等）と「疑問詞＋か」（何か、いつか、いくらか、何枚か、等）を別にし、直接疑問（～か。、～か？、～か」、～かな。、～じゃないか、等）を分けた。その上で、文中のカ節について、「動詞＋か」、「名詞（＋助詞 or＋コピュラ）＋か」、「動詞＋のか」を分けた。以上の分類を行った上で、今回の調査では、動詞に直接「か」が後接する用例（ただし、「かどうか」は含む）を対象とした⁸。それぞれの割合は以下の表1に示した（なお、数値は絶対的なものではなく、目安である）。

表1 近代語の小説（文学）テキストにおける助詞「か」の分類とその割合

動詞＋か ⁹	名詞＋か	動詞＋のか	疑問詞＋か	直接疑問	慣用	合計
1610	1274	715	1555	4043	240	9437
17.1%	13.5%	7.6%	16.5%	42.8%	2.5%	100.0%

一般に「間接疑問文」と呼ばれる構文は上の表の「動詞＋か（「形容詞＋か」も含む）」と「名詞（＋助詞 or＋コピュラ）＋か」、「動詞＋のか」、「疑問詞＋か」にまたがっている。すなわち、次の（21）のように助詞「か」が後接するのが主語と述語（相当）を持つ「節」であり、かつこれを直接に受ける主節述語が存在する構文が間接疑問文と考えられている。

（21） {彼が来るか／彼が良い人か／彼が来るのか／彼は誰か} 分からない。

よって本来であれば、これらの形式を持つ構文をすべて扱えば良かったが、未だ従属カ節の様々な構文タイプの整理が十分にできていない段階であるので、本稿では、上の表1の動詞に直接「か」が後接する1610例を中心に扱う。「動詞＋か」における各構文タイプの割合は以下のとおりである（「その他」には先に挙げた比況構文、前後構文、慣用的な構文を含む）。

表2 近代語における「動詞＋か」の各構文の割合（カッコ内の数字は先に挙げた用例番号）

間接疑問 (1)	依存 (6)	間接感嘆 (14)	照応 (12)	潜伏疑問 (13)	内容 (8)	二文連置 (7)	引用 (15) (16)	その他 (17) (18) (19) (20)	合計
316	1	13	29	8	57	234	813	139	1610
19.6%	0.1%	0.8%	1.8%	0.5%	3.5%	14.5%	50.5%	8.6%	100.0%

以下、まず間接疑問構文について、どのようなタイプがあり、どのような特徴があるかを記述していく。

⁸ なお、「A か、B か、C か…」のような並列のカ節については、主節動詞にもっとも近い最後のカ節を残してそれ以外は削除したが、「動詞＋か」以外の用例には、重複用例や削除すべき用例（ノイズ）が残っている可能性がある。

⁹ わずかながら形容詞も含まれる。

5. 心理述語の間接疑問構文 (316 例)

本研究では、カ節を受ける主節述語が心理動詞である構文をもっとも典型的な間接疑問構文とした。間接疑問構文を広く捉える立場では、後で見る依存構文や内容構文、照応構文、潜伏疑問構文も間接疑問構文の下位タイプと見なされるが、本節では、まず、典型的な間接疑問構文として心理述語の構文を取り上げる。

主節述語が心理動詞である典型的な間接疑問構文において、カ節で表される単純不定命題は、話し手¹⁰（もしくは話し手以外の誰か）の心的領域内で展開される疑問内容を表す。この構文の要素となる心理動詞は、主に思考・認識・言語活動を表す動詞であるが、一部の感情動詞もこれを構成する。

(22) 単純不定
A スルカ (-助詞) 補語 心理述語

(23) 鶏が何をしているか知らないばかりではない。(阿部一族・舞姫)

この構文は、その主節述語のタイプによって、次のように分けられる。藤田（1983, 1997）は、格助詞を伴わない間接疑問構文を対象に、カ節と主節述語との関係を「一種の応答的意味関係」と認め、主節述語を「未決、既決、対処」の3つに分類した。未決とは、「知らない、分からない、覚えていない、疑問に思う」などの述語で、「はたして、いったい」などの副詞との共起が可能であるという構造的特徴を持つ。既決とは、「知っている、分かっている、明らかだ」などの述語で、「はたして、いったい」などの副詞との共起が不可能であるという構造的特徴を持つ。3つ目の対処とは、「調べる、尋ねる、説明する、教える、確かめる」などの述語で、これらは命令形にできるという構造的特徴を持つ、とする。

本研究では、藤田の上の分類を、カ節で表される情報を話し手が有しているか否か¹¹（それが話し手自身の疑念であるか否か）という観点を重視して、用例を未決、既決、対処に分けた。未決タイプとは、話し手がカ節で表される疑問の情報を有していない、カ節の疑問は話し手自身の疑念であることを表すタイプである。既決タイプは、カ節で表される情報を話し手が有していることを表すタイプである。このとき、カ節で表される疑問は、話し手以外の誰かの疑念である。対処タイプは、話し手¹²の情報獲得に関わる述語である¹³（志波・金水 2015）。

高宮（2005: 100-101）は、室町時代と江戸時代における間接疑問文の主節述語の特徴について、「一つには全体的に〈未決〉タイプが多いこと、二つには〈未決〉タイプと〈対処〉タイプが見られ、〈既決〉タイプは現れないこと、三つには〈対処〉タイプは願望のタイが付くか、命令形の形を取ること」と述べている。

明治時代に入り、既決タイプが次第に現れ始める。今回調査した近代語の小説テキストでは、

¹⁰ 典型的には話し手自身だが、近代語ではこれが拡張し、2人称や3人称の主語で述べられる場合もある。しかしやはり1人称主語が圧倒的に多く、3人称であっても話し手の視点が置かれる人物である。

¹¹ Nakada（1980）では、この「情報を有するか否か」という観点から主節述語が考察されている。

¹² 典型的には話し手であるが、「彼に私がどこにいるか教えてあげて」のように、話し手以外の人の情報獲得である場合もある。

¹³ 以上の観点を重視して分類したため、藤田の分類とはその外延が若干異なっている。

すでに1割以上を占めていた。しかし、現代語においても、小説（文学）テキストでは、既決と対処タイプの割合はそれほど高くない（志波 2015）。既決と対処タイプは、現代語では論説文（評論）テキストに多く見られる¹⁴。よって、近代においても、より論説的なテキストにおいては、既決や対処タイプがもう少し発達していた可能性がある。

表3 間接疑問構文の主節述語の各タイプの割合

未決	既決	対処	合計
247	38	31	316
78%	12%	10%	100%

また、心理述語の間接疑問構文の発達を見る上でもう1つ重要な観点として、カ節がどのような疑問文のタイプであるか、という点がある。本研究では、これを疑問詞疑問（「何を買うか」）、肯否疑問（「服を買うか（どうか）」）、正反疑問（「服を買うか否か」）、選択疑問（「服を買うか、靴を買うか」）の4つのタイプに分けて分類した。先に2節で述べたように、高宮(2005)によれば、疑問詞疑問の間接疑問節は他のタイプに遅れて、江戸時代後期になって一般的になったという。一方で、高宮(2005)のデータを見ても分かるのだが、疑問詞疑問の間接疑問節は、いったん現れ始めるとたちまち優勢になり、江戸後期には他のタイプを抑えてもっとも頻度の高いタイプとなっている。今回のデータを見ても、近代語における心理述語の間接疑問節は、疑問詞疑問タイプの割合がもっとも高くなっている。

表4 間接疑問節の各タイプの割合

疑問詞	肯否	正反	選択	合計
256	37	20	3	316
81%	12%	6%	1%	100%

以下、はじめに未決タイプの具体的な用例を見ていく。

5.1 未決タイプ

未決タイプは、話し手がカ節で表される命題の情報を持っていない、つまり、カ節の疑問は話し手自身の疑念であることを表す。今回のデータからは、未決タイプには次のような動詞（述語）

¹⁴ 参考までに『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）における2001年の書籍（コア・非コア）における割合を示しておく（BCCWJから抽出された用例には論説文が多かった）。論説文テキストでは、文学作品とはかなり異なった分布を示している（志波・金水 2015）。

別表1 BCCWJ（2001年、書籍）における間接疑問構文（「動詞＋か」）の各タイプの割合

未決	既決	対処	文脈不明	合計
328	336	378	12	1054
31.1%	31.9%	35.9%	1.1%	100.0%

を分類した。ほとんどが思考動詞であるが、わずかながら感情動詞も含まれる。

- (24) 知らない (知れない, 知らぬ, 存せぬ), 分からない, 解せぬ, 解し兼ねる, 領解し得ない, 不分明である, 料られぬ, 会得出来ない, 不明である, 覚えがない, 覚えていない, 忘れてしまう, 覚束ない, 思い放つ能はず, 疑ふ, 疑わしい, 疑問だ, 思煩ふ, 遅ふ (ためらふ), 無頓着である, 感ぜず, 迷う, 決定^{きめ}ていない, 見えない; 見当がつかぬ, 判断もつかない, 勘定がし切れぬ, 気のつかない, 気に掛からぬ, 見分のつかぬ, 弁別のつかない, 不思議に思う, 見向きもしない, 訳が解らず; 懊悩する, 苦しむ, 驚く

話し言葉に近い文学作品のデータ (特に会話文の中で) では, 「知らない, 分からない」が述語の大多数を占める (表5に両述語の用例数と割合を示す)。「知れない」という形も多いが, これもすべて「知らない」として数に含めている。なお, 「知らない」は「知らないが, …」という外部構造で用いられることが多い ((25), (38), (40) - (43) 参照)。

- (25) 何か生理上の理由でもあるか知らんが, とにかく, 山に仕事をしてやがてたべる弁当が不思議とうまいことは誰も云う所だ。(野菊の墓)
- (26) 腹では何を思っているか知れはしない。(生)
- (27) その一輪がどこまで簇がって, どこまで咲いているか分らぬ。(草枕)
- (28) 「そんなこといったって, 聴くか聴かねえか分かるもんか」(土)

表5 未決タイプの「知らない」「分からない」の割合

知らない	分からない	未決タイプ
104	98	247
42%	40%	100%

高宮 (2003, 2004, 2005) の調査から, 間接疑問構文の述語はまず「知らない」から発生し, 他の未決述語で用いられ始めたことが明らかになっている。近代語の小説 (文学) テキストにおいても, 未だ「知らない, 分からない」が間接疑問構文の大多数を占めることが見て取れる。

なお, 「分からない」による構文は, カ節の動作が話し手 (主節述語の主語と同一人称) の未来の意志的な動作の場合, 「V- テイイカ 分からない」という形で述べられる。

- (29) 【前略】、そうしたら自分の身の始末に困ると思うし、ああも思うし、こうも思うしで、果はどうして好いか自分にも分らなくなる。(其面影)
- (30) 何からどう手を着けて好いか分らない。(平凡)

「知らない, 分からない」以外には次のような例がある。(33) のように, 動作動詞を用いて「関心がない」ことを述べている用例もある。

- (31) 【前略】と酒井先生方の書生が主税に告げたのと、案ずるに同日であるから、其の編上靴は、一日に市中の何のくらいに足跡を印するか料られぬ。(婦系図)

- (32) 死んでいるか生きているかさえ弁別のつかない彼にもこういう懸念が湧いた。(道草)
 (33) 傍にどんな人がいるか見向きもしなかった。(門)

このほか、思考認識（のみ）ではなく感情を表す動詞も未決に含めたが、数は多くない。これらの動詞ではカ節が助詞（ないし後置詞）を伴っていることが注目される。特に、(34) の「驚く」では、格助詞なしで述べることができない。この特徴は、間接感嘆構文に通ずるものである。

- (34) その頃初めて牛込に住んだ人々は、必ず一度はこの声の何なるかに驚く。(生)
 (35) 或は雲と水が自然に近付いて、舵をとるさえ瀬き海の上を、いつ流れたとも心づかぬ間に、白い帆が雲とも水とも見分け難き境に漂い来て、果ては帆みずからが、いずこに己れを雲と水より差別すべきかを苦しむあたりへ—そんな遙かな所へ立ち退いたと思われる。(草枕)
 (36) その返事をいかに書くべきかに就いて一夜眠らずに懊悩した。(蒲団・重右衛門の最後)

近代語の用例には、カ節内にウ・ヨウやダロウ、丁寧を含むものがわずかながら見られる。未だ従属カ節が心理述語の補語としての地位を確立していなかったためかと考えられる。さらに、後に 5.3 の対処タイプの中で見るが、漱石の作品には、ダロウカ節に助詞を後接させた例（ダロウカヲ）もある。

- (37) 一層また鳥羽へ行って、あの巖に掴まって、(こいし、こいし)と泣こうか知らぬ、膚の紐になわつけて、海へ入れられるが気安いような、と島も海も目に見えて、ふらふらと月の中を、千鳥が、冥土の使いに来て、連れて行かれそうに思いました。(歌行燈・高野聖)
 (38) 私は考へる、たとへばこの鳴沢の翁の為た事が不都合であらうか知れん、けれども間貫一たる者は唯一度の不都合ぐらゐは如何にも我慢をしてくれんければ成るまいかと思ふのだ。(金色夜叉)
 (39) ほかの教師に聞いてみると辞令を受けて一週間から一カ月位の間は自分の評判がいいだろうか、悪るいだろうか非常に気に掛かるそうであるが、おれは一向そんな感じはなかった。(坊っちゃん)
 (40) 何遍致して見ましたか知れませんが、ございますけれど、何も聞えは致しませんので。(金色夜叉)
 (41) お見忘になりましたか知れませんが、戦地でお世話になった輜重輸卒の麻生でござります。(阿部一族・舞姫)
 (42) 「どんな理由がありますか知りませんが、ともかく妻子があれば一家団欒の樂を享けないのは嘘でしょう？ 貴様さびしく思いませんか」(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
 (43) 「誰が然う云うことをお耳に入れましたか存じませんが、芸者が内に居りますなんて飛だ事でございます。【後略】」(婦系図)

この未決タイプは、動詞が「知れない」の形になると、間接感嘆構文に近づき、その境界があいまいになる。特に、カ節に「どんなに、どれほど」といった疑問詞が含まれる場合に、この傾

向が強まる。「程度が大きすぎて知ることができない＝あまりにも程度が大きい」という意味にずれ込んでいくものと考えられる。例えば、(44)は、実際には「非常に辛かった」、(45)は「何度も泣いた」ということを述べる間接感嘆構文とも考えられる（(40)も参照）。

(44) 翌日のが無いと言われるより、どんなに辛かったか知れません。（歌行燈・高野聖）

(45) 子を持てば七十五度泣くというけれども、この娘の事ではこれまで何百度泣いたか知れやアしない。（浮雲）

次の(46)は、未決タイプにも見えるが、(47)と同じ二文連置の背景注釈タイプと考えられる。後節「姿が見えない」ことの背後にある事情を推論し、その疑問を前節に差し出している構文である。主節述語が知覚動詞である構文は、これを間接疑問構文と認めてよいか、判断が難しい。知覚動詞については、6.4の潜伏疑問構文でも取り上げる。

(46) 山嵐はどうなったか見えない。（坊っちゃん）

(47) 校長はいつ帰ったか姿が見えない。（坊っちゃん）

次のように、従属カ節に助詞がつかずに読点で区切られ、主節述語の前に主語相当の名詞句や副詞句が置かれると、二文連置構文の言い換え型に近づいていく。二文連置構文と間接疑問構文の関係については、6.6でも考察する。

(48) 主人は何故にこの翁の事を斯くも聞きたださるるか、教師が心解し兼ねたれど問はるるまに語れり。（武蔵野）

5.2 既決タイプ

既決タイプは、話し手がカ節で表される命題の情報を有しており、カ節の疑問は話し手以外の誰かの疑念であることを表す。既決タイプには次のような動詞（述語）を分類した。

(49) 分かる（解る）、見る、思い至る、説明する、知っている（能く知る）、告げる、心づく、語らず、窺ふ

近代のデータには、当該の情報を得るに至る原因・理由・条件（波下線）を伴う構文が非常に多い。このような原因・理由・条件を伴う構造を経て、既決タイプが徐々に定着していったのだろうか。この構造は、6.1で見る依存構文にもつながっていく。

(50) 宗助は所の新聞で、杉原の何時着いて、何処に泊っているかを能く知ってはいたが、【後略】（門）

(51) 「今度の事を見ても、如何に間が恨まれてゐるかが解りませう。【後略】」（金色夜叉）

(52) こんな拷問に近い所作が、人間の徳義として許されているのを見ても、如何に根強く我々が生の一字に執着しているかが解る。（硝子戸の中）

(53) 此方の人措いて下さんせ、と洒落にも嗜めて然るべき者までが、其折から、一寸留女の格

で早瀬に花を持せたのでも、河野一家に対しては、お薦さえ、如何の感情を持つかが明かに解る。(婦系図)

- (54) それと共に彼は隣の森の中の群集の囁々と騒ぐのを耳にして 自分が今何のために疾走して来たかを心づいた。(土)
- (55) 「阿母さん、お止しと云えば！」と時子はもう菌痒そうに肝癪声になって、「誰と歩いてたか、聞かなくったって分ってるじゃありませんか。【後略】」(其面影)
- (56) 平の座敷か、そでないか、貴客がたのお人柄を見りゃ分るに、何で和女、勤める気や。(歌行燈・高野聖)
- (57) 「着いたのは昨日の六時、姉の家に行って聞き糺せば昨夜何時頃に帰ったか解るが、今日はどうした、今はどうしている？【後略】」(蒲団・重右衛門の最後)
- (58) かくて邸内遊覧の所望ありければ、先づ西洋館の三階に案内すとて、迂廻階子の半を昇行く後姿に、その客の如何に貴婦人なるかを窺ふべし。(金色夜叉)

上のような、原因・理由・条件のない既決タイプは、主節述語が文末言い切りではない構造を持つものがほとんどである。

- (59) そうしてそれが母の場合とどう違っているかに思い到った時、彼は心のうちで又細君に向って云った。(道草)
- (60) そして、その大騒の何を意味しているかを語らずに、そのまま急いで向うへと下りて行つて了った。(蒲団・重右衛門の最後)

このほか、既決タイプには、聞き手に対して話し手自身の行為を認識するよう要求するという意味の、「見る」の命令形や、「知っているか」という疑問形の述語も含めた。

- (61) 此の毛唐人めら、汝、何うするか見やあがれ。(婦系図)
- (62) 「え？」と哲也は目を瞋って、「じゃ、何処に居るか、君、知ってるのか？」(其面影)

最後に、既決タイプと他の構文との相互関係について述べたい。既決タイプは、カ節で表される命題の情報を話し手が有している、つまり、カ節の内容は話し手にとっては疑問ではない、確定した事実であるという意味的特徴から、体系上、間接感嘆構文に非常に近い。例えば、(63)は「こんなに悲しいことはない」、(64)は「道庁の計営が非常に困難が多い」、(65)は「私は非常に切ない思いをしている」ということを述べる感嘆構文とも考えられる。それぞれ、「これより上の(こんなに)」「如何に」「どんな」といった句が感嘆の意味をもたらしやすいのだと考えられる。

- (63) 一時に両親に別れて、死目にも逢はず、その臨終と謂へば、気の毒とも何とも謂ひやうの無い……凡そ人の子としてこれより上の悲が有らうか、察し給へ。(金色夜叉)
- (64) 然し余はこの道路を見て拓殖に熱心なる道庁の計営の、如何に困難多きかを知ったのである。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (65) 私は全く後悔しました！ 貫一さん、私は今になつて後悔しました紹 悉い事はこの間か

らの手紙に段々書いて上げたのですが、全^{まる}で見ても下らないのでは、後悔してゐる私のどんな切ない思^{いは}をしてゐるか、お解りにはならないでせうが、お目に掛つて口では言ふに言れない事ばかり、設ひ書けない私の筆でも、あれをすつかり見て下すつたら、些とはお腹立も直らうかと、自分では思ふのです。(金色夜叉)

5.3 対処タイプ

対処タイプは、話し手がカ節で表される命題の情報を有しておらず、それを獲得するために何らかの策を講じる（講じない）ことを表す。対処タイプには、次のような述語を含めた。

- (66) 考える、確かめる、試す、尋ねる、聞く、想像する、顧慮する、観察する、相談する、説明してくれる、云え、頭の中で描く、比較事を致す

先の既決タイプにも言えることだが、対処タイプは、未決タイプに比べ、カ節が助詞を伴うことが非常に多い。また、高宮（2005）では、江戸後期においても、対処タイプの述語は願望のタイがつくか、命令形の形をとるという形態的な制約があったことが指摘されているが、近代の小説（文学）テキストにおいては、それほど制約は見られない。ただし、未決タイプに比べて、命令形や意向形、「V- テミル」の形で述べられることが多いという傾向はうかがえる。

- (67) 彼等は嫖客に対する時、わが容姿の如何に相手の瞳子に映ずるかを顧慮するの外、何等の表情をも發揮し得ぬ。(草枕)
- (68) 彼はどうしたらこの門の門を開ける事が出来るかを考えた。(門)
- (69) 御両親のある事を忘れないで、御両親がどれほどお歎きなさるかを考へて、気を取直してくれ、ゑ、宜いか、【後略】(にござりえ・たけくらべ)
- (70) 彼はその日のその夜に会ふ毎に、果して月の曇るか、あらぬかを試しに、曾てその人の余所に泣ける徴もあらざりければ、さすがに恨は忘れしかと、それには心安きにつけて、諸共に今は我をも思はでや、さては何処に如何にしてなど、更に打歎かるるなりき。(金色夜叉)
- (71) 「否、一ツ心当りは無いか、家を聞いて見ようと思うんです。【後略】」(婦系図)
- (72) この上は明日中に何とか処置を着ける積り、一方には手紙で母に今一度十分訴たえてみ、一方には愈々という最後の処置はどうするか妻とも能く相談しようと、進まぬながらも東宮御所の横手まで来て、土手について右に廻り青山の原に出た。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (73) ああ云ふ主有る婦人と関係遊ばして、始終人目を忍んで逢引してゐらつしやる事を触散しますから、それで何方が余計迷惑するか、比較事を致しませう。(金色夜叉)

近代語には、現代語ではよく用いられる「調べる」や、情報獲得のための策を講じないことを表す「別にする、置いておく、二の次だ」などの述語、また、次の例のように V- テミルという形の動作動詞も確認されない。

- (74) そう思って枕木が燃えているのを踏み消して、どんな臭がするか腹這いになって嗅いでみた。(黒い雨)

先にも述べたが、特に対処タイプの中に、漱石の作品を中心に「だろうかを」という用例が見られる。「V-むかを」という形を現代語に翻訳した形だろうか ((90), (96) も参照)。

- (75) 彼は今の自分が、結婚当時の自分と、どんなに変わって、細君の眼に映るだろうかを考えながら歩いた。(道草)
- (76) 御米はその時真面目な態度と真面目な心を有って、易者の前に坐って、自分が将来子を生むべき、又子を育てるべき運命を天から与えられるだろうかを確めた。(門)
- (77) 彼はこの袴を着けた男の身の上に、今何事が起りつつあるだろうかを想像したのである。(門)

次の例もカ節に丁寧とタロウを含んでおり、カ節の従属度が相対的に下がっている。

- (78) 就いては今日私の机の抽斗に百円入れて置きましたそれが、貴女のお帰りになると同時に紛失したので御座います、如何がでしょう、もしか反古と間違ってお袂へでもお入になりませんかでしたらうか、一応お聞申します」と腹から出た声を使って、グッと急所へ一本。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)

6. 間接疑問構文の周辺の構文

間接疑問構文は、従属カ節を持つ様々な構文との相互交渉の中で発達してきたと考えられる。以下では、先に3節で述べた間接疑問構文と関わる周辺の構文について概観する。構造的に間接疑問構文に近いものから見ていく。

6.1 依存構文 (1 例)

依存構文とは、2つのカ節を持ちうる構文で、A節の不定命題の値の決定がB節で述べられる不定命題に依存することを表す。「A節カハ B節カニ／デ 依存動詞」という構文において、A節とB節は「帰結-条件」という意味的な関係を持っている。江口(1996)は、この種の構文が表す「依存」の意味について、「条件部の変項の取り得る値が変わるごとに帰結部の変項への値の割り当ても変わるということが基本にある」(江口1996: 347)と述べている。そして、条件となる節の意味役割を「決め手」と呼び、通常の不定命題を「単純不定」と呼んでいる(同: 351)。本稿でもこの命名を採用している。なお、この構文における「Aスルカ」もしくは「Bスルカ」は、潜伏疑問名詞として述べられることもある(「彼が行くかは花子が行くかによる」vs.「彼が行くかは花子の意志による」)。また、事態と事態の一般的な依存関係を表すため、テンス・アスペクトは超時である。

- (79)

単純不定(帰結)	決め手(条件)
A スルカハ主語	B スルカニ/デ補語

 依存述語 (超時)

- (80) に関わる、に影響する、による、で決まる／決める、で違う、で異なる、で変わる、に任せる、で分かる／知れる

現代日本語の論説文のデータには、相当数の依存構文が現れるが（志波・金水 2015 参照）、近代語にはほとんど用例が見つからなかった。現代語でも、文学作品にはあまり現れない。今回の近代語小説のデータでは、漱石の作品に 1 例見つかるのみである（(81)）。よって、(80) には、現代語の論説文テキストに現れる依存構文の動詞を例として挙げた。

- (81) それが何時までつづくかは、私の筆の都合と、紙面の編輯の都合とできまるのだから、判然した見当は今付きかねる。（硝子戸の中）

近代語の論説文テキストとして、『明六雑誌』と『太陽』を調べてみると、『太陽』の中に、わずかながら依存構文を見つけることができた。ただし、カ節を 2 つ持つ構文は見られない。古いものから順にいくつか用例を挙げる。

- (82) 如何に南亞の内陸に戦闘を繼續しつゝあるかに由て、其一斑を知るに足らん。（太陽 1901, 4）
 (83) 即ち「ヒーゼン」又は「ペーガン」の名が如何に輕侮賤蔑の意を有するかによりて察知するを得べし、【後略】（太陽 1901, 7）
 (84) それを理解するか否かによつて投票を決する。（太陽 1917, 14）
 (85) 一に山口氏が如何なる程度まで労働問題に諒解を有するかに依つて窺知し得らるゝ譯けである。（太陽 1925, 3）
 (86) 種々の動物は食品なくして如何程長く生存し得るものであるかと言ふに、この堪へ得る期間は動物の種類によつて異り、又、若いとか老いたるかによつて異なる。其他肥滿せるか羸瘦せるか換言すれば貯藏物質を餘計に持つてゐるか否かによつて異なる。（太陽 1925, 5）
 (87) 政界の前途は政本合同が可能であるか否かで決定するわけだ。（太陽 1925, 10）

この依存構文は、カ節の命題が話し手にとっての疑問というより、ごく一般的な、総称的な人々にとっての疑問であると言える。つまり、話し手の疑念ではなく、他の誰かの疑念であるという意味で、これは既決タイプに体系上近いところにある構文と考えられる。(82) (83) (85) などに既決述語があることを見ても、このことがうかがえる。既決タイプが原因・理由・条件を表す句を伴う構造で用いられる中で次第に定着し、さらにこれに遅れて、この依存構文が条件を伴う既決タイプの構造の影響を受けつつ発達してきたのだろうか。今後、この依存構文の発達については、論説文テキストを中心に調査する必要がある。

6.2 間接感嘆構文（13 例）

カ節で表される命題が誰の疑念（疑問）でもなく、話し手が事実として認めつつこれを感嘆の対象としている構文を間接感嘆構文とした（稲田 2007 参照）。カ節の命題が疑問ではないという点で間接疑問構文と異なるが、カ節にダロウや丁寧などの要素を含み得ない点、また、カ節を受ける主節動詞が心理動詞である点でも間接疑問構文に非常に近いところに位置していると考えら

れる。一方で、間接感嘆構文を構成する心理動詞は間接疑問構文の要素となる動詞とは異なる。また、カ節が対象であることを明確にするためか、格助詞が必ず後接する。

- (88) 感嘆の対象
A スルカ-ヲ補部節 感情述語

(89) 思ふ、嘆す、責める、ほこる、味わう

それほど用例があるわけではないが、今回の小説（文学）テキストのデータには次のような例が見られた。

- (90) 彼は己の不幸の幾許不幸に、人の幸の幾許幸ならんかを想ひて、又己の失敗の幾許無残に、人の成效の幾許十分ならんかを想ひて、又己の契の幾許薄く、人の縁の幾許深からんかを想ひて、又己の受けし愛の幾許浅く、人の交せる情の幾許篤からんかを想ひて、又己の恋の障碍の幾許強く、人の容れられぬ世の幾許狭からんかを想ひて。(金色夜叉)
- (91) 然し母と妹との節操を軍人閣下に献上し、更らに又、この十五円の中から五円三円と割いて、母と妹とが淫酒の料に捧げなければならぬかを思い、さすがお人好の自分も頗る当惑したのである。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (92) 宗助は過去を振り向いて、事の成行を逆に眺め返しては、この淡泊な挨拶が、如何に自分等の歴史を濃く彩ったかを、胸の中で飽まで味わいつつ、平凡な出来事を重大に変化させる運命の力を恐ろしがった。(門)
- (93) 【前略】山は依然として太古、水は依然として不朽、それに対して、人間は僅か六千年の短き間にいかにその自然の面影を失いつつあるかをつくづく嘆ぜずにはいられなかった。(蒲団・重右衛門の最後)
- (94) 更に蛙はひっそりと静かな夜になると如何に自分の声が遠くかつ遙に響くかを矜るものの如く力を極めて鳴く。(土)
- (95) 穩かに眠れる妻の顔、それを幾度か窺って自己の良心のいかに麻痺せるかを自ら責めた。(蒲団・重右衛門の最後)

次の(96)は、先の(90)の直後の文脈に現れる文であるが、未だ疑問の意味が残ると考え、間接疑問構文の対処タイプと見なした。しかし、「おもう」という動詞は、現代語では間接疑問構文を構成するものではない。今後、近代の用例をさらに調査する中で、間接疑問構文と間接感嘆構文の要素となる動詞を見極めていきたいと思う。

- (96) 嗚呼、既に己の恋は敗れに破れたり。知るべからざる人の恋の末終に如何ならんかを想ひて。(金色夜叉)

6.3 照応構文 (29例)

照応構文は、カ節の命題が話し手もしくは他の誰かの疑問を表し(単純不定)、これをいったん「それ」などの照応形が受け、さらにそれを心理述語が受けるという形式を持つ。

(97) 単純不定対象
A スルカ, ソレ-助詞 前節照応句 心理述語

照応構文は、典型的な心理述語の間接疑問構文に意味的にも構造的にも非常に近い。次のような例がある（照応形に網掛け）。

- (98) 「さうなんですけれど金ゆゑで兩個が今死ぬのも余り悔いから、三千円きつと出すか、出さないか、それは分りませんが、【後略】」（金色夜叉）
- (99) 自分は何故東京に上ったか、又た何時来たか、今どうして暮らしているか、これらの処を尋ねて見ようとして止した。（武蔵野）
- (100) 然し機嫌買な彼がどの位綿密な程度で細君に説明してやったか、その点になると彼はもう忘れていた。（道草）
- (101) 何故意久地がないとて叔母がああ嘲り辱めたか、其処まで思い廻らす暇がない、唯もう腸が断れるばかりに悔しく口惜しく、恨めしく腹立たしい。（浮雲）

照応構文は、先に述べたように、間接疑問構文に意味・構造的に近い構文だが、カ節にダロウなどの推量や意向形、マシヨウなどの丁寧形を含むことができる点で、従属カ節の独立性が高く、この点では二文連置構文にやや近いところに位置している。

- (102) 【前略】 ああ高坂の録さんが子供であつたころ、学校の行返りに寄つては巻烟草のこぼれを貰ふて、生意気らしい吸立てた物なれど、今は何処に何をして、気の優しい方なればこんなむづかしい世にどのやうの世渡りをしてお出なうか、それも心にかかりまして、実家へ行く度に御様子を、もし知つてもゐるかと聞いては見まするけれど、【後略】（にぎりえ・たけくらべ）
- (103) そうしてその挿入した酸漿の根が知覚のないまでに軽微な創傷を粘膜に与えて其処に黴菌を移植したのであつたろうか、それとも毎日煙の如く浴せ掛けた埃から来たのであつたろうか、それを明らめることは不可能でなければならぬ。（土）
- (104) 夫はどうなさるなあ、夫に道が立たん事になりはせまいか、そこも考へて貰はにやならん。（金色夜叉）

6.4 潜伏疑問構文（8例）

潜伏疑問構文は、話し手もしくは誰かの疑問を表すカ節の命題に、これと同じ不定命題を含む潜伏疑問名詞句が並列的に後続し、これを心理述語が受けるという形式を持つ。従属カ節は、潜伏疑問名詞句の具体的な疑問の内容を表している。つまり、上に見た照応構文と非常によく似た構造を持つ。違いは、心理述語の対象となる助詞を伴う名詞句が指示代名詞であるか、潜伏疑問名詞であるかという点のみである。

(105) 単純不定対象・潜伏疑問
A スルカ AbsN- 助詞 補語 心理述語

高宮 (2004) では、ヤラによる間接疑問構文について、この潜伏疑問構文を経て間接疑問構文が成立したことが仮説的に述べられている。上の照応構文と潜伏疑問構文は、二文連置構文と間接疑問構文をつなぐものであると考えられるが、具体的にどのような構造変化を経て、間接疑問構文が成立したのかについては、未だ明らかでないことが多い。共時態の体系において、これらが二文連置構文と間接疑問構文をつなぐ位置にあるとしても、通時的な発達の過程については慎重な調査が必要だろう。以下用例を挙げる (潜伏疑問名詞に網掛け)。

- (106) 「何時伺ったら好いか御都合を聞かして頂きたいんですって」(道草)
- (107) 【前略】この世はこれほど住みよいに、何故人はそう住み憂く思ふか、殆どその意^{こころ}を解し得まい、【後略】(浮雲)
- (108) 江戸が東京に改まった時か、それともずっと後になってからか、年代はたしかに分らないが、何でも私の父が拵えたものに相違ないのである。(硝子戸の中)
- (109) 健三は自分の前に坐っている人の真面目さの程度を疑った。果してこの男が彼の復讐を比田まで頼み込んだのだろうか、又比田が自分達と相談の結果通り、断然それを拒絶したのだろうか、健三はその明白な事実さえ疑わずにはいられなかった。(道草、ノカ節¹⁵)

知覚動詞による次の構文は、一見潜伏疑問構文のように見えるが、「影も形も」や準体節「小声ながら頻に物言ふ」は「分からない」や「知らない」などの補語にならないため、これは潜伏疑問名詞ではないと考えられる。よって、知覚動詞による以下の構文は、二文連置構文の背景注釈タイプである。

- (110) 谷を見下したが、どこで鳴いてるか影も形も見えぬ。(草枕)
- (111) 答はあらで、眩くか、規くか、小声ながら頻に物言ふが聞ゆるのみ。(金色夜叉)

次の例も、一見潜伏疑問構文のように見えるが、二文連置構文である (言い換え型)。(112) では「一つの出来事を五条にも六条にも解釈した」話し手の、その心の中の具体的な解釈の仕方 (内容) がカ節で提示されている。一方で、(109) は、似たような構造であるが、「それを拒絶したのかを疑う」のように、(ノ)カ節が主節の心理述語に続くと考えられるので、潜伏疑問構文とした。しかし一方で、「その明白な事実さえ疑わずにはいられなかった」話し手の、その心の中の具体的な疑い (疑念) がカ節で提示されているとも考えられ ((107) - (111) も同様)、連続的である。

- (112) 自分に対する夫を平和で親切な人に立ち返らせる積なのだろうか、又はただ浅はかな征服慾に駆られているのだろうか、一健三は床の中で一つの出来事を五条にも六条にも解釈した。(道草、ノカ節)

¹⁵「ノカ節」の用例は、本稿の統計の数の対象にはしていないが、構文の間の関係を見る上で重要と思われる用例を適宜挙げている。「名詞 - カ節」についても同様である。

6.5 内容構文 (57 例)

カ節で表される命題が、疑問を代表とする心的態度を表す抽象名詞 (AbsN) によって受けられ、かつ、カ節の命題が抽象名詞句の内容を表す構文を内容構文とした。

- (113)

単純不定
Aスルカ -ノ/トノ/トイウ

内容提示節 AbsN,

単純不定
AbsN-ハ Aスルカ

内容提示節-ダ

- (114) 要素となる抽象名詞: 問題, 疑問, 原因, 問い, 痛苦, 態度, 思い, 観, 感, 考え, 予期, 弁解, 不安, 相談, 説, 事, 点

以下用例を見ていく (カ節を受ける抽象名詞句に網掛け)。「節-カ-ノ AbsN」という構造は、後で見る比況の意味ではなく疑問の意味としては、漱石の作品にしか用例が見られない。現代語ではこの構造で、カ節が疑問詞疑問であることは難しいだろう。一方で、カ節がノ格によって直接に抽象名詞にかかっていくこの構文は、すべて間接疑問構文としても述べるができることから、体系上、間接疑問構文に近いところに位置すると言える。例えば、(115) は「それが何処からどう始まって、どう曲折して行くかは分からない」のように、カ節の命題をそのまま間接疑問構文として述べるができる。

- (115) けれども、それが何処からどう始まって、どう曲折して行くかの問題になると全く無知識なので、継続という言葉を解しない一般の人を、私は却って羨ましく思っている。(硝子戸の中)
- (116) 要点はただその人が金を貸してくれるか、くれないかの問題にあった。(道草)
- (117) 彼は子供に対する母親の愛情が父親のそれに比べてどの位強いかの疑問にさえ逢着した。(道草)
- (118) こういう手腕で彼に返報する事を巨細に心得ていた彼は、何故健三が細君の父たる彼に、賀正を口ずから述べなかったかの源因¹⁶に就いては全く無反省であった。(道草)

次に、「カ節-トノ/トイウ 心理名詞」の用例を見る。ここではカ節が引用のトで導かれるため、上に見たノ格や間接疑問節よりも、意向形や推量形 (ダロウ)、ジャナイカなどを含むことが多い。こうした構文は、カ節の命題をそのまま間接疑問構文として述べるができない点で、上の「節-カ-ノ AbsN」に比べれば、間接疑問構文から体系上やや離れているところにあると考えられる。一方で、先に2節で紹介したように、間接疑問構文が成立する以前は、このような「カ節トイウ名詞」による構文が間接疑問構文の表す意味を表す構文の1つとして用いられていた(高宮 2004)。

- (119) 常よりは淡きわが心の、今の状態には、わが烈しき力の銷磨しはせぬかとの憂を離れたるのみならず、常の心の可もなく不可もなき凡境をも脱却している。(草枕)
- (120) 「【前略】露骨に云って終えば、時代におくれやしないかなという考えは、時代の中心から

¹⁶「原因」と「問題」や「疑問」などの名詞では、カ節と名詞の関係が異なるが、本稿では、内容構文の名詞とカ節の関係についてまでは考察が及ばなかった。今後の課題としたい。

離れて居る人の考えに過ぎないのだろうよ」(野菊の墓)

- (121) 勘次は鶏の抜毛を見て馳が出たのではないかという懸念を懷いて其処ら中を隈なく見た。
(土)
- (122) それからもしや自分の解釈が間違っていはいまいかという不安にも制せられた。(道草)
- (123) お貞は茶の間の洋燈を後に、背を丸くして坐っていたが、疵持つ足の唯そわそわと落ち着かぬ様子、先程の足音をちょっと耳に入れたので、勘附かれたかという疑がその胸にあった。
(生)
- (124) 自分は果してあの母の実子だろうかというような怪しい惨ましい考が起って来る。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (125) 「いっそのこと山上の小屋に一泊して噴火の夜の光景を見ようか」という説も二人の間に出たが、先きが急がれるので愈々山を下ることに決めて宮地を指して下りた。【後略】」(武蔵野)

「AbsN - ハ 節 - カ - ダ」ないし、「節 - カ - ガ AbsN - ダ」という形式を持つ構文は今回のデータには数例のみ見つかった。

- (126) 人々の話柄は作物である、山林である、土地である、この無限の富源より如何にして黄金を握み出すべきかである、彼等の或者は饅頭の酒を傾けて高論し、或者は煙草をくゆらして談笑している。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (127) この心持ちを、どうあらわしたら画になるだろう一否この心持ちを如何なる具体を藉りて、人の合点する様に髣髴せしめ得るかが問題である。(草枕)

疑念ではなく感情や態度を表す心理名詞が核となる次のような内容構文は、疑問ではなく比況を表す構文になっている。つまり、内容構文には、疑問を表すタイプと比況を表すタイプがあることになる。(129)に「あたかも」という副詞があるが、現代語であれば「かのような」という形式で表されるような構文である。この構文は、先に(17)で比況構文と呼んだ「節 - かのごとく / かのように」という構文と体系上連続的である。

- (128) 絵の具箱は酔興に、担いできたかの感さえある。(草枕)
- (129) 今までつまらない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、あたかもそれが他人であったかの感を抱きつつ、やはり微笑しているのである。(硝子戸の中、名詞述語)
- (130) ことに昨今自分が已むなく置かれた境遇からして、この際多少自己を侮辱しているかの観を抱いて雑巾を手にしていた。(門)
- (131) 透間に射し入る日の光は、風に動かぬ粉にも似て、人々の袖に灰を置くよう、身動にも払われず、物蔭にも消えず、細かに濃く引包まれたかの思がして、手足も顔も同じ色の、蟬にも石にも固るか、とばかり次第に息苦しい。(婦系図)
- (132) 哲学で候うの科学で御座るのと言って、自分は天地の外に立っているかの態度を以てこの宇宙を取扱う。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)

6.6 二文連置構文 (234 例)

もっとも直接疑問文に近い構造を持つ従属カ節構文に「二文連置構文」がある。二文連置構文は、従属カ節を直接に受ける述語や名詞句が後節に存在しない。このため、二文連置構文における前節は、間接疑問節よりも従属度が低く、ダロウや丁寧といった要素を含みうる。「二文連置」という名は野村 (1995) による命名だが、近代以前の文章は句読点による書式が整っていないこともあり、現代語であれば句点で区切られるところも、区切られずに続いている場合がある。このため、二文連置には前節の従属度の程度により様々なタイプがあるが、間接疑問構文との関係を考える上で、構造的に重要と思われるものを以下で取り上げ¹⁷、その意味・構造的特徴を分析する。なお、本節では、二文連置構文の中で、トークン頻度の高いものから順に見ていく。

6.6.1 背景注釈型

二文連置構文の中で、頻度も高くもっとも典型的に見られるタイプが背景注釈型である。背景注釈型とは、後節で表される様子や現われといった事実の背後にある事情（主に原因・理由）を推論し、それを前節に注釈句として添えた構文である¹⁸。後続の「事実叙述句」には、話し手が捉えた事象がそのまま差し出されるため、ダロウなどのモダリティはつかない。前節には、現代語では「からか」「ためか」「せい」か」といった形式が用いられることも少なくないが（服部 1992）、近代語ではこれらの形式は未だ発達しておらず、「V-シテカ」ないし「節-カシテ」という形式を用いた背景注釈型が確認される。

- | | |
|--|--|
| (133) <div style="display: flex; justify-content: space-between; font-size: 0.8em;"> 単 純 不 定 様子・現われ </div> A スルカ 背景注釈句 B スル 事実叙述句 | <div style="display: flex; justify-content: space-between; font-size: 0.8em;"> 単 純 不 定 様子・現われ </div> A シテカ/スルカシテ 背景注釈句 B スル 事実叙述句 |
|--|--|

背景注釈型では、もっとも典型的には前節（従属カ節）の主語と後節の主語が同一であり、この点では従属カ節はむしろ句であり、前節と後節の結びつきは強いのであるが、前節のカ節は推量のダロウや意向形を含みうる。そして、この文の主語は、後節の様子を知覚し、その背景を推論している話し手（視点保持者）とは別の実体である。この点で、後節の心理述語の主語が典型的には話し手自身である間接疑問構文とは構造的に大きく異なる。また、間接疑問構文と異なり、文全体を疑問文にすることもできない。以下、用例の背景推論を表す注釈句に下線、様子・現われを表す事実叙述句に波下線を引く。

- (134) 主税は漸々、其も唾が乾くか、かすれた声で、【後略】（婦系図）
- (135) しばらくしてから、宗助は何を考えたか、小さい位牌を筆筒の抽出の底へしまってしまった。（門）
- (136) 民子は年が多いし且は意味あって僕の所へゆくであろうと思われたと気がついたか、非常に愧じ入った様子に、顔真赤にして俯向いている。（野菊の墓）

¹⁷ なお、本稿では二文連置構文として、間接疑問構文に近い3つのタイプを取り上げたが、これ以外に、後節で述べられる事態の時間や場所といった状況が不明であることを前節で不定命題として差し出すタイプ（「8時になっていたか、彼がようやく帰ってきた」「いずれの御時にか、」）などがある。

¹⁸ 背後にある事情を推論するので、現代語では前節が「Vスルノカ」と、「の」が入ることが多い。

- (137) 哲也は妙な面をして黙って、葉村が何やらまだ照隠しに頬に饒舌るのはもう能くも聞かず、又しても振向いて改札口の方を見ようとすると、今まで何処に居たか姿を見せなかった時子が、ツイ其処の窓外に立っていたのと、端なくも目が出逢ったので、極り悪るそうに衝と余処を向いて了ったが、【後略】(其面影)
- (138) 勘次はその冷えが障ったのであったろうか心持が悪いというて田から戻って来るとそれつきり枕も上らぬようになった。(土)
- (139) 別の一室には書生でも居るか、微吟の聲が洩れていたがその前の薄暗い板間を通ると突当の部屋が山田巡査の宅。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (140) 嫁は盃の儀式を為ながらも、新しい夫の美しい鬚と優しい柔かな応対とを嬉しく、前の夫の荒々しいのに比べて、一種暖かい思を胸に漲らせていたが、母親の蒼く嶮しい皺だらけの顔を見ると、兼ねてその難かしいのを聞いていた故でもあろうか、忽ち後から水を浴せ懸けられたような気がした。(生)
- (141) 人の浅ましきか、我の愚なるか、恩人は酷くも我を欺きぬ。(金色夜叉)
- (142) 【前略】見ると大きな巾着茄子を二つ三つ丸ごと焼いて、うまく皮を剥いたのへ、花鰹を振って醤油をかけたのさ、それが又なかなかうまいのだ、いつの間にそんな事をやったか其の小手廻しのえいことと云ったら、お町は一苦労しただけあって、話の筋も通って人のあしらいもそりや感心なもんよ。(野菊の墓)

「V- シテカ」, 「節 - カシテ」には次のような例がある。

- (143) をりしも漕来る舟に驚きてか、蘆間を離れて、岸のかたへ高く飛びゆく蜚あり。(阿部一族・舞姫)
- (144) 土蔵の上には五六人ばかり人が上って頻りに拒いでいた様子だったが、これに面喰ってか、一人々々下りて、今は一つの黒い影を止めなくなつて了った。(蒲団・重右衛門の最後)
- (145) シカシ今井の叔父さんは流石に倦憊れてか、大きな体軀を僕の傍に横えてぐうぐう眠つて了った。(武蔵野)
- (146) 【前略】靴の塵埃だらけも好いが、その横腹の皺目の擦切れた隙から、靴下も穿かぬかして、素足の甲が微見える。(其面影)
- (147) 鹿は少しも人の居るに気が付かぬかして、小藪の蔭を閑に歩るいて此方に近いて来た。(武蔵野)
- (148) 【前略】遊ぶに屈強なる年頃なればにやこれを初めに一週には二三度の通ひ路、お力も何処となく懐かしく思ふかして三日見えねば文をやるほどの様子を、朋輩の女子ども岡焼ながら弄かひては、【後略】(にぎりえ・たけくらべ)

次の例は、後節で述べられる事実が話し手自身のことである点で、他の多くの背景注釈型とは異なる。話し手自身がある事態を自分が実現できないことの背後の事情を推論し、前節で提示している。ここで興味深いのは、(152) のように後節が思考・認識を表す心理動詞であると、間

接疑問構文に意味的に近接していくということである。

- (149) 俺はその道を尽してゐるか、尽さうと為てゐるか、思つた女と添ふ事が出来ん。(金色夜叉)
- (150) 本当に己れは木の股からでも出て来たのか、遂いしか親類らしい者に逢つた事も無い、【後略】(にぎりえ・たけくらべ、ノカ節)
- (151) 「ほんに、わしゃ今日らお内儀さん処さ行くべと思つていたら、何ちこつたか こんな騒ぎではあ行くも出来ねえで、わしゃ昨日帰つて来た処なのせえ、お内儀さん」(土)
- (152) 眼の色と云わんより、眼と地の相交わる所が、次第に色を取り替えて、いつ取り替えたか、殆んど吾眼の欺かれたるを見出し得ぬ事である。(草枕)

6.6.2 課題提示型

課題提示型は、前節の従属カ節で課題としての疑問が提示され、それに対する一応の回答や処置が話し手の判断として後節に述べられる構文である。後節には話し手の判断が提示されるので、この節の述語はダロウやカモシレナイなどのモダリティを含むことができる。

- (153)

単 純 不 定 A スルカ	(暫 定 的) 判 断 B ダ/ダロウ
-------------------------	---------------------------------

課題提示節 回答提示節

課題提示型は、後節が前節の課題を受けた条件形で始まることが多い。前節を受ける条件形などをまったく持たない(158) - (160)などは、前節と後節とのつながりが読み取りにくく、かなり直接疑問構文に近づいている。

- (154) 「【前略】焼て粉にして飲んでしまおうか、そうしたら些とはあやかるかも知れん、アハハハハ」(浮雲)
- (155) 断ったら嫌われようか、嫌われては甚だ不好い。(婦系図)
- (156) 「そんな事で俺の胸が霽れると思つてゐるか、殺しても嫌らんのだ」(金色夜叉)
- (157) 比ぶれば幾干か服装は優っているが、似たり寄たり、何故二人とも洋服を着ているか、寧ろ安物でも可いから小ザッぱりした和服の方が可さそうに思われるけれども、【後略】(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (158) イヤ世界十幾億万人の中、平気な人でないものが幾人ありましようか、詩人、哲学者、科学者、宗教家、学者でも、政治家でも、大概は皆な平気で理窟を言ったり、悟り顔をしたり、泣いたりしているのです。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)
- (159) <【前略】このはるかな思いをどこに寄せたらよいであらうか、ただ悠久な大空のみがそれにふさわしい>。(草枕)
- (160) 一宿屋へ茶代を五円やるのはいいが、あとで困りやしないか、田舎へ行って頼りになるは御金ばかりだから、なるべく儉約して、万一の時に差支えない様にしなくっちゃいけない。(坊っちゃん)

次の例も、前節で課題としての疑問を提示し、その回答を後節で提示しているとも見なせる。

一方で、後節が話し手の認識を表す述語であるため、間接疑問構文に限りなく近づいている。これは、藤田（1997）で、本稿で典型的間接疑問構文とするもののカ節と心理述語との関係が「一種の応答の意味関係を内実として成立するもの」（p. 158）とするところにも通ずる。（161）は、同じくカ節に丁寧を含む（40）－（43）と連続的であるが、読点で区切られている点で、二文連置的である。

（161）「何うでしたか、最う忘れましたよ。【後略】」（婦系図）

（162）「どうするこったか自分の子供でもありゃすめえし、俺らがにゃ分んねえな」卯平は何処までも乾たいいようである。（土）

6.6.3 言い換え型

言い換え型とは、後節で述べられる事実（様子）について話し手が自身の解釈から捉えなおして前節に不定命題として差し出す構造を持つタイプである。後節で述べられる事実を、話し手が不定命題として捉えなおし、言い換えていることが表される。ただし、このタイプについては、用例も限られているため、未だ正確な一般化に至っていない（言い換えられている部分に波下線）。

（163）

単 純 不 定	事 実
A スルカ	B スル
言い換え節	事実叙述節

（164）どれだけ涙が出たか、隣室の母から夜が明けた様だよと声を掛けられるまで、少しも止まず涙が出た。（野菊の墓）

（165）壮といわんか美といわんか惨といわんか、僕等は黙然たまま一言も出さないで暫時く石像のように立て居た。（武蔵野）

次のように、後節の主述を含む事実全体が前節で言い換えられるとき（前節は「不思議でならない」「全く自ら弁ぜず」の具体的内容）、後節が心理述語であると、間接疑問構文に限りなく近づいていく。

（166）【前略】お京さん母親も父親も空つきり当が無いのだよ、親なしで産れて来る子があらうか、己れはどうしても不思議でならない、と焼あがりし餅を両手でたたきつつ例も言ふなる心細さを繰返せば、【後略】（にごりえ・たけくらべ）

（167）【前略】又空く神は傷み、魂は驚くといへども、我や怒る可き、事や哀むべき、或は悲む可きか、恨む可きか、抑も喜ぶ可きか、慰む可きか、彼は全く自ら弁ぜず。（金色夜叉）

また、後節に含まれる名詞句について、前節で不定命題として言い換える場合、後節に心理述語が含まれると、潜伏疑問構文に近づく¹⁹。

¹⁹「書く」という動詞は、現代語では間接疑問構文の要素になるが、近代語では用例は見つからなかったため、用例（169）は潜伏疑問構文とはせず、二文連置の言い換え型に含めた。なお、「書く」という動詞は、外的運動を伴う動詞であるが、「言う、相談する」などの言語活動動詞（発話動詞）と同類であり、本研究ではこれを心理動詞としている。心理動詞と動作動詞については、奥田（1968-72）の分類を基にしている。

- (168) 神聖なる恋以上に二人の間は進歩しておりはせぬか、けれど手紙にも解らぬのは恋のまこと
との消息であった。(蒲団・重右衛門の最後)
- (169) どうして手提革包を拾ったかその手続まで詳わしく書くにも当るまい。(牛肉と馬鈴薯・酒中日記)

6.7 引用構文 (813 例)

最後に、引用構文について概観する。引用構文は、先に用例 (15) (16) で見たように、「節 - か」が引用のトで受けられるものすべてを分類した。これは、非常に直接疑問構文に近いタイプから間接疑問構文に近いタイプまでヴァリエーションが豊富である。ここでは、間接疑問構文との関係で、従属カ節に引用の - トが直接後接し、主節に思考・認識の心理動詞を持つタイプの用例のみを挙げる。引用構文の引用節はかなり自由に様々な形式を含みうるため、様々な節タイプがある。以下には、かなり間接疑問構文に近いものを挙げたが、(172) - (174) のように、そのままでは間接疑問構文で述べられないタイプが多く、ここに引用構文が用いられる理由があるのだろう。なお、先に2節で紹介したように、高宮 (2004) では、間接疑問構文が成立する以前は、このような引用構文が、間接疑問構文が表す意味を表していたことが述べられている。

- (170) 師としての温情と責任とを尽したかと烈しく反省した。(蒲団・重右衛門の最後)
- (171) 僕の胸はワクワクして来た、何故叔父さんを起さなかったかと悔んだが最早遅い。(武蔵野)
- (172) 何方かという、昔よりも今の方が却て肥ってはいはしまいかと疑れる位であった。(道草)
- (173) 筆をとって書こうとすれば、書く種は無尽蔵にあるような心持もするし、あれにしようか、これにしようかと迷い出すと、もう何を書いてもつまらないのだという呑気な考も起ってきた。(硝子戸の中)
- (174) 昨夜の月に似もやらぬ、今日は朝より曇り勝にて、今降り出すか降り出すかと危んでいたが、見ると既に雨になって、【後略】(蒲団・重右衛門の最後)

7. おわりに

以上、近代の小説 (文学) テキストにおける間接疑問構文について、高宮の一連の調査と比較しながら、その発達の痕跡がどの程度見て取れるかを記述した。今回の調査により、明治期に入っても、小説 (文学) テキストにおいては、間接疑問構文の主節述語はやはり未決タイプが優勢であり、また、間接疑問節のタイプとしては疑問詞疑問タイプがもっとも多く用いられていることが明らかになった。

一方、江戸後期においては述語の形態に制約があった対処タイプであるが、近代においてはかなり自由な形で用いられていることも分かった。また、未発達であった既決タイプも、1割以上の割合で用いられている。ただし、既決タイプの構文はその用いられる構造に特徴があることも分かった。既決タイプは、原因・理由・条件を表す句を伴った構造で述べられることが非常に多く、この構造は、明治期に現れ始めたと考えられる依存構文の発達にも影響を与えていると考え

られる。

さらに、本研究では、主節述語が心理動詞である間接疑問構文を典型的な間接疑問構文とし、これと同じ従属カ節を持つ構文として、依存構文、間接感嘆構文、照応構文、潜伏疑問構文、内容構文、二文連置構文を主に取り上げ、それぞれの構文の意味・構造的な特徴と、間接疑問構文との関係（ネットワーク）を考察した。この中で、未決タイプの「知れない」や既決タイプ（「分かる」「知っている」等）の間接疑問構文は、間接感嘆構文に意味的に非常に近いことを明らかにした。また、これまで間接疑問構文との具体的な関連性が明らかでなかった二文連置構文であるが、この構文には少なくとも背景注釈型、課題提示型、言い換え型という3つのタイプが存在し、いずれも後節に心理述語が含まれると、間接疑問構文に近づいていくことが分かった。

本研究では、動詞述語（と形容詞述語）の従属カ節のみを扱ったが、今後は、名詞述語のカ節や「の」を含む「ノカ節」についても考察を広げていきたい。また、明治期に一般化したと見られる、疑問節に後節する助詞の使用実態や、「かどうか」の成立についても詳細な調査を進めていきたいと考えている。

また、今回調査したデータは、「小説」というジャンルに限ったにもかかわらず、やはり様々な文体が入り混じる結果になってしまった。「小説」というジャンルは、「論説文」に比べればより話し言葉に近い文体が用いられると考えたが、「会話文」と「地の文」では大きく文体が異なり、また、明治という時代が特に近代における言文一致への変化の過渡期にあり、作家によってその文体に大きな差があることも否めない。今後はこうした文体の差に対しより慎重に調査を進めなければならない。

なお、本稿では、近代語における間接疑問構文の実態を可能な限り記述するため、なぜそのような特徴を持つのかという理由が不明である言語事実についても、できる限り指摘し、記述するよう心掛けた。本稿の記述・考察は未だ不十分であり、整理されていない点も多々あるが、今後、さらに調査が進む中で、1つ1つの言語事実が有機的な関連性を持ちながら解き明かされていくものと考えている。

参考文献

- 江口正（1990）「日本語の間接疑問文の構文論的特徴—数量詞・不定代名詞との類似点について—」『九大言語学研究室報告』11: 40-53.
- 江口正（1994）「間接疑問節が二つ共起する文について」『九大言語学研究室報告』15: 70-81.
- 江口正（1996）「間接疑問節の担う意味役割—特に「決め手」解釈について」『愛知県立大学外国語学部紀要 言語・文学編』28: 343-358.
- 江口正（1998a）「日本語の間接疑問節の文法的位置づけについて—不定的同格要素として—」『九大言語学研究室報告』19: 5-24.
- 江口正（1998b）「引用節・間接疑問節と内容名詞句の共起関係について」『愛知県立大学外国語学部紀要 言語・文学編』30: 325-344.
- 江口正（2002）「『AはB次第だ』の解釈について—値の間の相関関係—」『福岡大学日本語日本文学』12: 71-82.
- 江口正（2013）「間接疑問節をとる述語の類型と項構造」日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究、第1回研究発表会（2013年9月2日、国立国語研究所）ハンドアウト.
- 藤田保幸（1983）「従属句『～カ（ドウカ）』の述部に対する関係構成」『日本語学』2: 76-83.

- 藤田保幸 (1997) 「従属句『～カ (ドウカ)』再考」『滋賀大学教育学部紀要 II, 人文科学・社会科学』47: 160-151.
- 服部匡 (1992) 「現代語における「～か」のある種の用法について」『徳島大学国語国文学』5: 7-65.
- 稲田俊明 (2007) 「間接感嘆文の認可条件と言語機能」『文学研究』104: 51-77. 九州大学大学院人文科学研究院.
- 石居康男 (2008) 「日本語の『懸垂疑問文』に関する一考察」『文の語用論的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言 (1)』(平成 19 年度科学研究費補助金研究成果報告書) 63-81.
- 衣畑智秀・岩田美穂 (2010) 「名詞句位置のカの歴史—選言・不定用法を中心に—」『日本語の研究』6(4): 1-15.
- 森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦 (編), 窪園晴夫 (監修) (2015) 『甕島里方言記述文法書』国立国語研究所. (<http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/bitstream/10112/9071/1/KU-1100-20150300-00.pdf>, 2015 年 8 月 20 日最終アクセス)
- Nakada, Seiichi (1980) *Aspects of interrogative structure: A case study from English and Japanese*. Tokyo: Kaitakusha.
- 野村剛史 (1995) 「カによる係り結び試論」『国語国文』64(9): 1-27.
- 奥田靖雄 (1968-72) 「を格の名詞と動詞のくみあわせ」『教育国語』12, 13, 15, 20, 21, 23, 25, 26, 28 (再録：言語学研究会編『日本語文法・連語論 (資料編)』1983, むぎ書房).
- 志波彩子 (2015) 「日本語の間接疑問構文の発達をめぐって—近代から現代へ—」日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究, 第 6 回研究発表会 (2015 年 3 月 15 日, 国立国語研究所) ハンドアウト.
- 志波彩子・金水敏 (2015) 「古代語・現代語資料の場合—コーパスからデータへ」JLVC2015 (国立国語研究所 時空間変異研究系 合同研究発表会, 2015 年 3 月 7 日) ハンドアウト.
- 高宮幸乃 (2003) 「現代日本語の間接疑問文とその周辺」『三重大学日本語学文学』14: 116-104.
- 高宮幸乃 (2004) 「ヤラ (ウ) による間接疑問文の成立：不定詞疑問を中心に」『三重大学日本語学文学』15: 124-111.
- 高宮幸乃 (2005) 「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」『三重大学日本語学文学』16: 104-92.
- 高山善行 (2015) 「間接疑問文の成立をめぐって—ケム型疑問文を中心に—」日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究, 第 7 回研究発表会 (2015 年 6 月 6 日, 大阪大学) ハンドアウト.

例文出典

- 1) 『CD-ROM 明治の文豪』(新潮文庫) より (表題の作品以外の作品も含まれる, 著者生年順)
 森鴎外 (1862 生) 『雁』『青年』『キタ・セクスアリス』『阿部一族・舞姫』『山椒大夫・高瀬舟』／二葉亭四迷 (1864 生) 『平凡』『浮雲』『其面影』／伊藤左千夫 (1864 生) 『野菊の墓』／夏目漱石 (1867 生) 『門』『草枕』『道草』『三四郎』『硝子戸の中』『坊っちゃん』／尾崎紅葉 (1868 生) 『金色夜叉』／国木田独步 (1871 生) 『武蔵野』『牛肉と馬鈴薯・酒中日記』／樋口一葉 (1872 生) 『にぎりえ・たけくらべ』／田山花袋 (1872 生) 『蒲団・重右衛門の最後』『田舎教師』『生』／泉鏡花 (1873 生) 『歌行燈・高野聖』『婦系図』／長塚節 (1879 生) 『土』
- 2) 『CD-ROM 新潮文庫の 100 冊』より
 井伏鱒二 (1898 生) 『黒い雨』
- 3) 国立国語研究所 (編) (2005) 『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース—』東京：博文館新社.
- 4) 国立国語研究所『明六雑誌コーパス』 http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/meiroku/

The Indirect Interrogative and its Relational Constructions in Late Modern Japanese

—A Network between Constructions with the Embedded *-ka* Clause—

SHIBA Ayako

Nagoya University / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

The studies of Takamiya (2003, 2004, 2005) have revealed that the Japanese indirect interrogative construction evolved gradually from the Muromachi (14th–16th C. AD) to the Edo period (17th–19th C. AD). We demonstrate how much of its historical trace can be found in Late Modern Japanese through the analysis of literature corpus data from the Meiji era (1868–1912) and describe its properties of meaning and construction, which are further contrasted with present-day Japanese. We confirm that the literature texts in the Meiji era still contain a high incidence of the main predicate “absence of information type” (not know, not understand, etc.), while the incidence of the “existence of information type” (know, be obvious, confirm, etc.), which did not appear in Early Modern Japanese, exceeds 10%. Furthermore, there is no morphological restriction in the “search for information type” (check, ask, etc.) in Late Modern Japanese, by contrast with Early Modern Japanese.

We presume the embedded construction with the psychological main predicate to be a typical indirect interrogative and deliberate the relationship (network) between other constructions with the embedded *-ka* clause, such as the dependence, indirect exclamatory, anaphora, concealed question, content clause, and two sentences in succession constructions, showing common and differing properties of their meaning and construction.

Key words: indirect interrogative construction, indirect exclamatory construction, two sentences in succession construction, concealed question, the absence of information type